縄紋時代前期の搬入土器

── 埼玉県内における北白川下層式 ──

近 江　哲(越生町教育委員会)

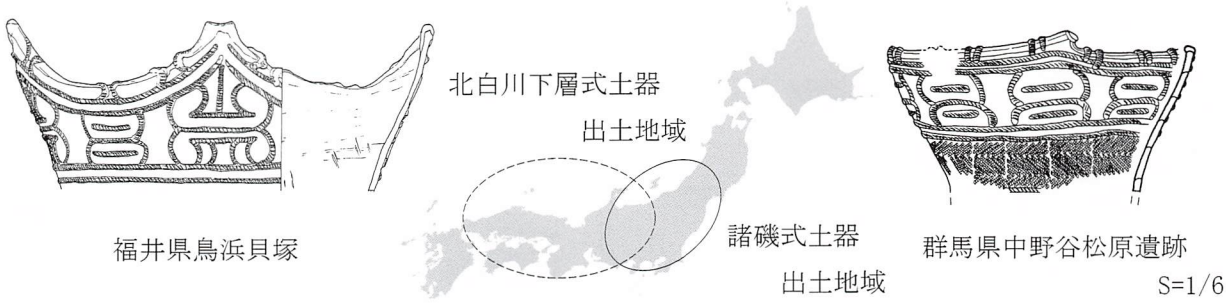
はじめに

関東における縄紋時代前期の土器型式は、初頭の花積下層式にはじまり、後続する関山式、黒浜式、そして後半期の諸磯式、末葉の十三菩提式が実在する。一方で前期は他地域との交渉も盛んで、発掘においては非在地の異なる顔つきをした土器を見ることがある。埼玉県内で出土した事例を挙げれば、関西地方の北白川下層式、東海の木島式土器、信州の有尾式土器が最たる例であり、隣接する諸地域との交流が窺われよう。いつの時代も遠隔地に分布する土器は、在地化の変遷・土器移動の行路を指し示す存在であり、縄紋社会を語るうえで魅力的な存在である。しかし、突発的な出土であることがほとんどで、文様構成を把握出来ない小破片であることが多く、存在を認識しながらも要として併行関係を論じにくいのが現状である。

本稿では、そのような他地域の土器の一つとして北白川下層式に着目してみたい。北白川下層式は薄手で繊維を含まないことを特徴としており、関西地方を中心として広域に分布する縄紋時代前期を代表する土器型式の総称である。広義においては、前期初頭にあたる羽島下層II式、また前期末葉の大歳山式までを含んだ名称として用いられることもある。先述のように、関東では客体的な存在である。

様式圏としては、諸磯式と北白川下層式の両極に対比されることもあるが、中部・東海ではまた異なった土器様相を示している。北白川下層式の東限をどこにするか、接触地域を如何に捉えるかは現在でも相違が多い。関東で出土する薄手の土器を近畿地方の北白川下層式と即断することに疑問を呈する声もあるように(増子1999)、関東・西の境界圏となる中部地方の動向に注意が払われるべきであろう。だが、１片の土器の故地を追い求めるのは、難しい。継起的な研究が望まれるところである。本稿では東海・中部の編年に多くを触れられないこともあり、ひとまず関東における出土状況を示す例として、北白川下層式として議論を進めたい。

まずは関東でなじみの薄い北白川下層式の研究略史を中心に述べ、次に関東の土器型式との関連性から述べたい。表記については、現行編年案として敷衍している網谷編年案による北白川下層Ⅰａ・Ⅰｂ・IIａ・IIｂ・IIｃ・III式を用いる(網谷1989)[1]。本来であれば、自らの編年を示すべきであろうが、ひとまず埼玉県内出土の北白川下層式の実態把握を主眼したい。



第１図　関東・関西出土の北白川下層式

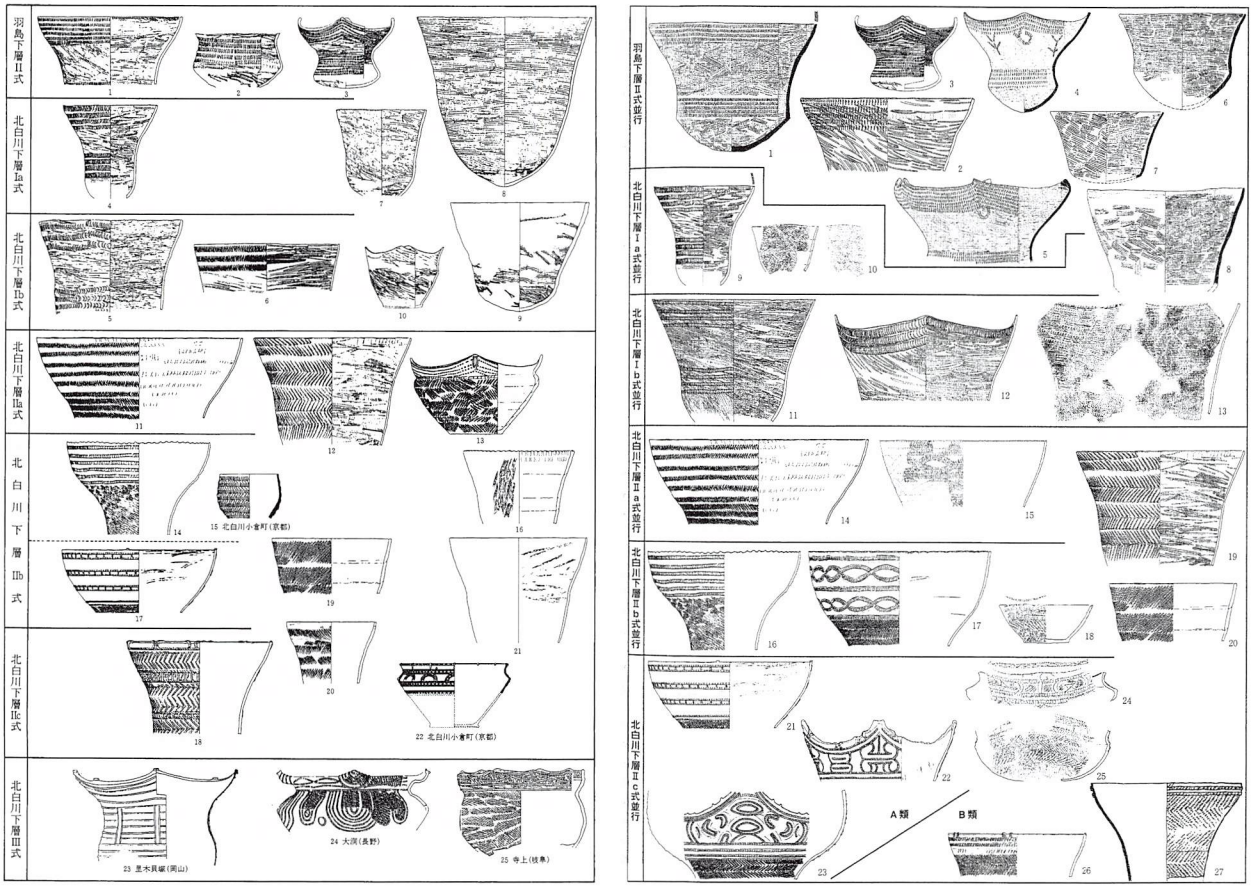
1　関東・関西の前期土器研究略史

北白川下層式に関する研究史は既に多くの優れた論考があり、そちらを参考にした(小野1989、縄文セミナー1999、南2002、鈴木2008ａ・ｂ)(第１表)。

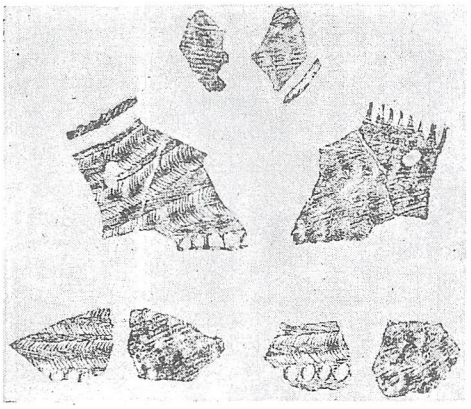
北白川下層式が初めて知られるのは、大阪府藤井寺市国府遺跡の発掘時である。その後、戦前の1934年に梅原末治らによって京都府左京区北白川小倉町遺跡が調査された(梅原1935)。層位的所見により「北白川下層式」「北白川上層式」が設定されており、標識遺跡である。報告には小林行雄による出土土器の考察があり、爪形文に着目して分類を行っている。その後、時間的関係を詳述していないものの、三森定男が北白川下層式を３類に分類しており(三森1938)、小林の分類を進め土器を説明したものとして注目されよう。

縄文時代の遺跡が希薄な関西において、前期の北白川下層式が良好な状態で確認されることは少ない。北白川小倉町遺跡、京都府志高遺跡、福井県鳥浜貝塚といった層位的に発掘されたと判断される一部の限られた遺跡を基軸に編年が進められてきたこともあり、これが地域的な様相を見るうえで指標でありながら弊害でもある。

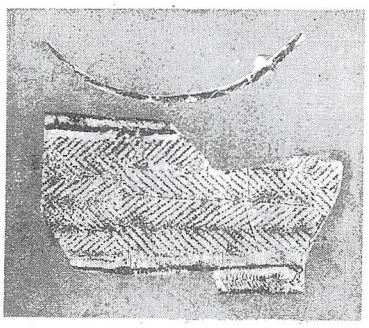
北白川下層式は北白川小倉町遺跡の発掘後、山内清男により「国府北白川１」として前期に位置づけされ、関東の諸磯ａ・ｂ式と対比されているが、当時、諸磯ｃ式はまだ設定されていない(山内1936、1937)。この分類についてはさらに後年となるが、佐原真が「私の誤解でなければ、山内先生は北白川下層を条痕のある類をＩ式、大歳山類似の梅原先生が、特殊凸帯文土器とよばれた類をIII式、それ以外をII式に分けられている」としている(佐原1956)[2]。



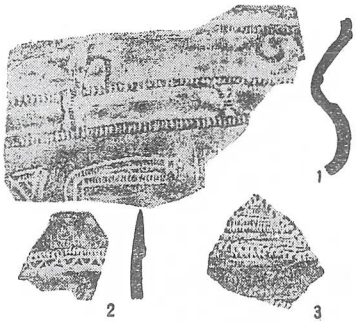
第２図　北白川下層式の編年案(左：網谷、右：鈴木)



埼玉県上福岡貝塚
北白川下層１式



神奈川県横浜市下田町東貝塚
北白川下層２式



東京都板橋区四枚畑貝塚
北白川下層３式

第３図　江坂による関東出土の北白川下層式

1930年代の中部地方では、江馬修が江名子糠塚遺跡の調査を基に糠塚式を設定した(江馬1934)。諸磯式類似としながらも薄手の堅緻なことに注目し、全く北白川下層式と同型式と出来ない、として中部地方の差異化を示した点は当時において卓見であった。しかし、現在まであまり評価されるに至っていない。鈴木徳雄は中間的な類型を構成するものとして、「糠塚類型」としている(鈴木2002)。江馬の型式設定を受け、八幡一郎は北白川下層式を爪形文の分類から３段階に設定している(八幡1935)。

翻って関東の情勢を見よう。突発的な出土も災いしてか、関東での北白川下層式は出土こそ知られたものの、併行関係を論じるのに足る好例は少ない。この頃埼玉県ふじみ野市(旧：上福岡市)上福岡貝塚の発掘が行われ北白川１式が出土しており、江坂輝彌により紹介されている。江坂は「北白川下層１式が関山式文化後半より黒浜式文化の前半に併行するぐらいの時期の文化であるとの想定が正しいならば爪形文は先ず近畿地方に発達し関東方面え伝播された文化」と捉えている(江坂1951ｃ)。江坂の編年案として、坂詰とともに発掘した横浜市港北区下田町東貝塚の北白川２式、四枚畑貝塚から出土した北白川３式をもって、関東・関西における一応の編年を系統づけた点は注目されよう。また両地域の併行関係を重視した江坂は、中部山岳地域の諸遺跡を重視し、接触領域における重要性を指摘した点も高く評価される。ただし、上福岡貝塚の資料は後年に奈良国立文化財研究所によって山内清男考古資料として公表され、現在的観点からは北白川下層II式であることが看過されている(黒坂1992)。

その後、北白川下層式の細分を進めたのは鎌木義昌である(鎌木1959)。鎌木は、条痕調整に爪形文を施文するＩ式、爪形文と縄紋を併用するII式、縄紋地にいわゆる特殊突帯文を施す平底のIII式に分類した。

その後1960年代には、北白川下層式の現在の編年を位置づけるうえで重要な福井県鳥浜貝塚が調査された。調査を行った森川昌和は、鳥浜式Ｉ～IV式の設定を行っている(森川1963)。これを受けて北白川下層式の細分案を示したのは、岡田茂弘による追証であった(岡田1965)。特にII式については連続爪形文・Ｃ字形爪形文・突帯上に刻目文または縄紋を施す土器としてIIａ・IIｂ・IIｃ式に細分している。

その後、組織的な発掘が開始され、1979年に調査された福井県鳥浜貝塚の資料から、鳥浜貝塚の成果を元に、現在に連なる北白川下層式の編年案を構築したのは網谷克彦である(網谷

1979、1982)。その後、『縄文土器大観』で見解を新たにし、編年案において従来のⅡｂ式・Ⅱｃ式の内容を修正しており、爪形文から凸帯文への変化をⅡｂ式(新)の段階とされ、凸帯文の内部自生の可能性を示唆している(網谷1989)。Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅱｃ・Ⅲ式の細分案を示し、第２図のような編年案を示した。

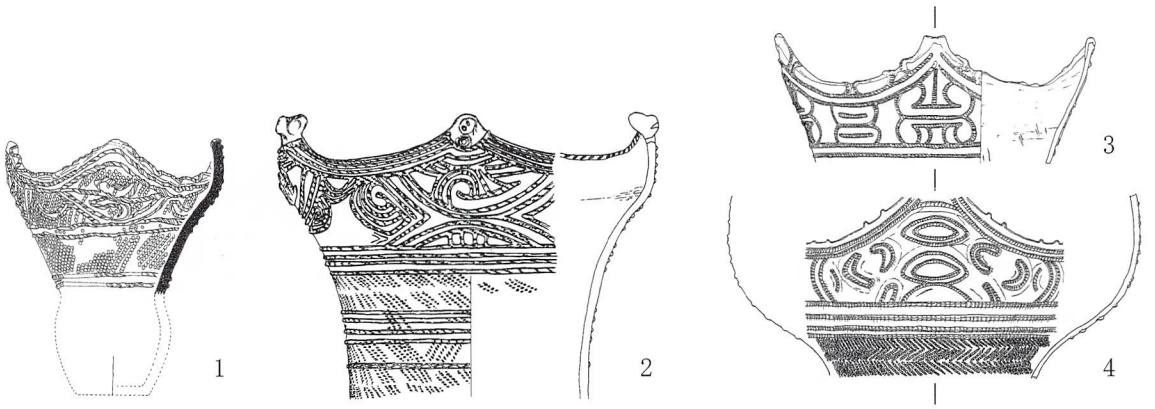
この頃、中部地方においても北白川下層式が注目されており、長野では『信濃考古綜覧』で北白川下層式の集成が示された。在地土器型式との差が述べられ、神ノ木式が北白川下層式の影響をされている点、有尾式との比較など、関東・関西をつなぐ準備が整いつつある時期である。市村勝己や小野正文は、甲信越地域における別々の立場から北白川下層式の問題点を学史の観点から再整理し、北白川下層式の問題を検討している(市村1984、小野1989)。

諸磯ｂ式の浮線文の出自に関しては、未だ解決をみない。この問題が複雑なのは、浮線文が諸磯ｂ式の内在的発展か、外的要因によるものか、という点である。この問題が本稿と関連深いのは、諸磯ｂ式の浮線文が、常に北白川下層式と対比されてきた経緯による。

1980年代に諸磯式研究が盛んになる以前に、安孫子昭二による浮線文土器の出現に二つの仮説を立てた言及がある(谷口1980)[3]。一つは諸磯ａ式の爪形文から隆帯が出現する要因がなく、関東の北白川下層Ⅲ式を模倣したとするもの。もう一つは諸磯ａ式の爪形文が多段に施文され、爪形文間に斜沈線を施したものが、浮彫化してそれまで爪形文が退化するというものである。この仮説は、多摩ニュータウン遺跡№175遺跡の成果で、搬入された北白川下層Ⅲ式の存在、折衷土器の存在から、安孫子自身は北白川下層式模倣説を採っている。また、中部地方の関わりを暗示しており、地域的な交渉を想定した点は注目すべき見解である。その後、谷口康浩は藤の台遺跡の整理において安孫子の説を推し、浮線文の出自に関して、北白川下層Ⅱｃ式の影響、つまり外的影響による変化を想定している(谷口1980)。

諸磯ｂ式を論じるうえで北白川下層式の影響を説いた研究に鈴木敏昭の一連の研究がある(鈴木1980，1991など)。共通する文様要素である浮線を論じるにあたり、文様要素としての浮線と、その当時慣用的な呼び名であった浮線文土器の起源を別にしている点は傾聴すべき見解である。対し、鈴木徳雄は内在的発展による浮線の発生をみており(鈴木1996)、好対照である。

また北白川下層式と関東前期土器型式の併行関係を論じたのは、土肥孝である(土肥1982)。北白川下層２ｂ式が口縁部文様帯の構成において、肋骨文風をなす事、胴部文様に弧線文をと



諸磯ｂ式：非対称　　北白川下層式：対称

1：千葉県木戸場遺跡　2：千葉県北前貝塚　　3・4：福井県鳥浜貝塚

第４図　土器における対称・非対称

梅原末治 1935	小林行雄 1935	八幡一郎 1935	山内清男 1936	三森定男 1938	江坂輝弥 1951	小島俊次 1956	佐原真 1956	鎌木義昌 1959	京大 1960	森川昌一 1963	岡田茂弘 1965	綱野克彦 1979	鈴木康二 2008
一．所謂無文土器	1類 条痕あるものを一括	（Ⅰ） 爪形小さく、整わない、間隔が粗漫 （Ⅱ） 爪形が中形ないし大形、爪形は密接し、両側に溝線を滞びる （Ⅲ） 爪形、ほとんどすべての爪形列の両側に溝線をもつ	国府北白川1	北白川A 北白川B 北白川C	北白川 下層1	北白川 下層Ⅰ	北白川 下層Ⅰ	北白川 下層Ⅰ 羽島下層 Ⅱ式	北白川下 層Ia類	北白川 下層IA群 鳥浜Ⅰ	北白川 下層Ia	羽島 下層Ⅱ	羽島 下層Ⅱ 並行
												北白川 下層Ⅰa	北白川 下層Ⅰa 並行
											北白川 下層Ⅰb	北白川 下層Ⅰb	北白川 下層Ⅰb 並行
二．挟義縄文系土器	2類A 貝爪形文				北白川 下層2	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ それ以外	北白川 下層Ⅱ 磯の森	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ 鳥浜Ⅱ	北白川 下層Ⅱa	北白川 下層Ⅱa	北白川 下層Ⅱa 並行
三．爪形文系土器	2類B 竹爪形文					北白川 下層Ⅲ				北白川 下層Ⅱ 鳥浜Ⅲ	北白川 下層Ⅱb	北白川 下層Ⅱb	北白川 下層Ⅱb 並行
	2類C 側線を有する竹爪形文					北白川 下層Ⅳ							
四．凸帯文系土器	3類 狭義縄文に一部凸帯文を加えたもの				北白川 下層3			北白川 下層Ⅲ 彦崎ZⅡ		E群 凸帯文 鳥浜Ⅳ	北白川 下層Ⅱc	北白川 下層Ⅱc	北白川 下層Ⅱc 並行
六．特殊凸帯文土器	5類 竹管で修正された特殊な凸帯文		大歳山	大歳山＝ 特殊凸帯文	北白川 下層3	大歳山＝ 特殊凸帯文	北白川 下層Ⅲ 特殊凸帯文		北白川 下層Ⅲ	北白川 下層Ⅲ	北白川 下層Ⅲ 大歳山と類似		北白川 下層Ⅲ 並行／ 大歳山 並行

第１表　北白川下層式の編年対比表

北関東	南関東	南関東	中部	新潟	北陸	北白川下層			東海
関根	細田	松田	今福	中野	山本	山本	小杉	網谷	増子
b1				刈羽古				II b (古)	小御所II
2	1	古	1				II c (古)	II b (新)	
					吉峰	II c			清水の上 I
3	2	中1	2						大麦田 I
				中					
4	3	中2(前)	3				II c (新)	II c	
5	4	中3(後)	4		蜆ヶ森 I				大麦田II
6	5	新	5・6	新	蜆ヶ森II	?	(+)	III	

第2表　縄文セミナーにおける編年案対比表

る土器があることから、諸磯a式に対比している。後続する諸磯b式では、口縁部に浮線をもつことから北白川下層2c式の凸帯文と対比している。また、塗り分け法による赤色塗彩土器の出現を北白川2b式に見出しており、関西地方が先行することに注目している。これは泉拓良が「突帯をもつ土器は東日本からの影響で生じた」としたのに対し(泉1979)、諸磯b式の前段階に浮線の要因が認めらず、浮線とは異なる観点から言及しており特筆されよう。

鈴木敏昭と土肥孝が解いた文様構成の左右対称・非対称という違いは、諸磯式と北白川下層式の施文構造の違いという点において着眼されるべき視点である。しかし、こうした鈴木敏昭の「浮線文土器の採用も、諸磯b式の基本的な構造を壊さない範囲でとり行われた出来事なのであり、地域的には、以後も浮線文が盛行する中部山岳地方で実現された可能性が高い」という認識に対し、接触地域となる中部地方をはじめ、北白川下層式との関係性において答える見解は隆盛しなかった。その後1999年の縄文セミナーで前期後半が取り上げられ諸磯式と北白川下層式の関係性が問題となった。諸磯b式の細分もさることながら、北白川下層式の細分の違いも明白となり、併行関係に問題が生じている(第2表)。

また、北白川下層式と諸磯式を論ずるうえで忘れてならないのが、浅鉢の存在である。前期に増加する浅鉢は、特に諸磯式期において、所謂UFO型と呼ばれるような特殊形態をなすこともあり、注目されてきた。浅鉢において搬入・模倣の実態を把握したのは小杉康である(小杉1985など)。ただし、小杉の編年案の念頭には、北白川下層式と諸磯式の細分において時間差を認めており、相互の影響を考慮しながらも先後関係が確定している点には注意を要する。

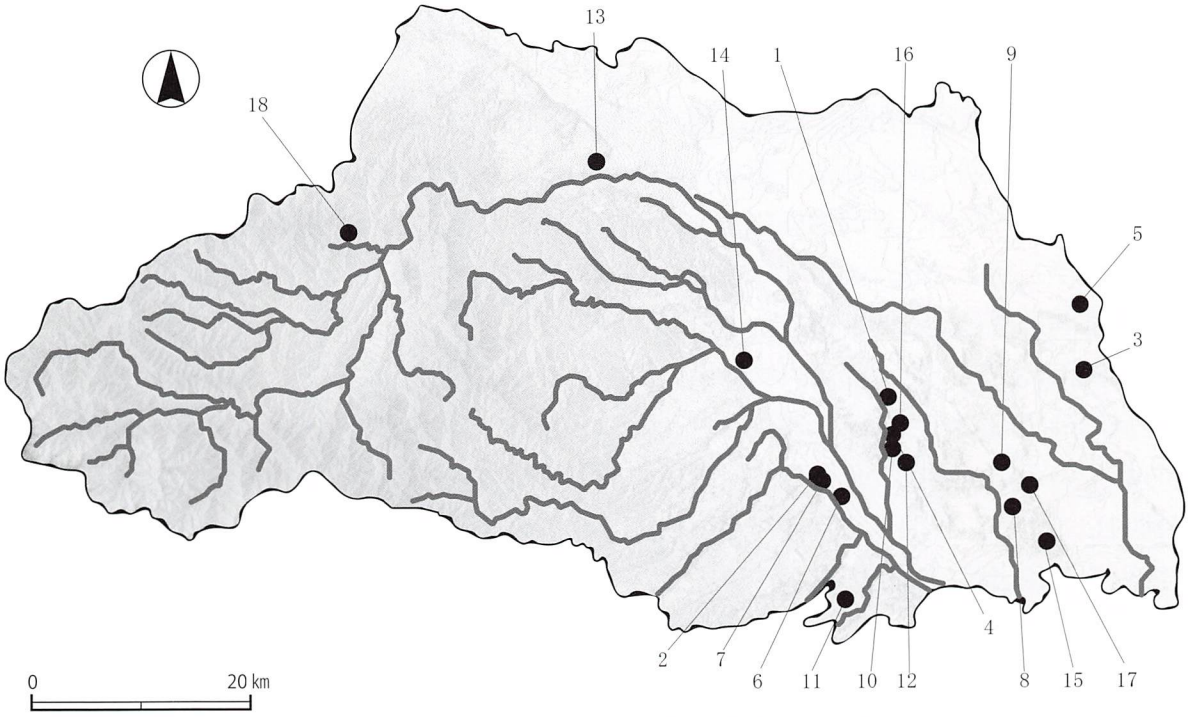
近年では、こうした北白川下層式と諸磯式の関係性と併行して、搬入土器に関する論考も増えてきた。最近では千葉県で房総における縄紋時代の非在地系土器の集成が行われ、14例の北白川下層式出土遺跡が報告されている(横山2009)。千葉県内における前期では、浮島式と諸磯式が拮抗する時期でもあり北白川下層式の出土例は散発的である。また胎土分析も行われているが、中部・東海・関西の違いが明確になっているようには思い難い。継続性が望まれる。

現状の問題点としては、関東・関西を二極化して捉える傾向があり、中部・東海を念頭とした広域編年網が必要となろう。発掘による遺構の共伴関係では充分でなく、型式間における変遷もまた指標の一つとして考察していかねばなるまい。

2 埼玉県出土の北白川下層式

関東の諸磯式に比較すると北白川下層式は薄手で堅く焼きしまり、堅緻であることを第一の特徴とする。これは土器の焼成が良く、灰白色を帯びた風合いをなすことにつながる。製作時において焼成に特徴があるのか、胎土によるものなのか、はたまた両方の作用で堅緻な灰白色の土器を作り上げるのか結論の出ぬところではあるが、そちらは胎土分析の進展を期待したい。

北白川下層式の縄紋は細かな繊細なものであり、装飾的な羽状縄紋をもつことが多い。これに対して、関東では黒浜式から羽状縄紋は少なくなり、諸磯ｂ式では荒い無骨な縄紋が多い。いずれも装飾を意識した北白川下層式とは異なり、文様の展開に影響しているのかもしれない。



第５図　埼玉県内における北白川下層式出土遺跡

番号	遺跡名	所　　在	遺　構	土器型式	文　献
1	氷川遺跡	上尾市戸崎氷川氷川	住居跡	北白川下層IIａ式	赤石・野村1981
2	上福岡貝塚	ふじみ野市(上福岡市)福岡	住居跡	北白川下層IIａ式	黒坂1992など
3	米島貝塚	春日部市(庄和町)米島	住居跡	北白川下層IIａ式	小林1965
4	下加遺跡	さいたま市(大宮)日進町１丁目	住居跡	北白川下層IIｃ式	田代治ほか1990
5	町道遺跡	春日部市(庄和町)西宝珠花	住居跡	北白川下層IIｃ式	長谷川・荏原2004
6	宮廻遺跡	富士見市勝瀬(第20地点)	住居跡	北白川下層IIｃ式	隈本・加藤2009
7	鷺森遺跡	ふじみ野市(上福岡市)駒林	住居跡	北白川下層IIｃ式 北白川下層III式	笹森1987
8	木曽呂遺跡	川口市木曽呂	包含層	北白川下層IIａ式	吉田1991
9	惣持院西遺跡	さいたま市(浦和)南部領辻惣持院	探　査	北白川下層IIａ式	高野1972
10	下手遺跡	さいたま市(大宮市)西区三橋５丁目	遺構外	北白川下層IIａ式	大宮市1968
11	内畑遺跡	新座市片山	住居跡	北白川下層IIａ式 北白川下層IIｂ式	谷井1970
12	御屋敷山	さいたま市(与野)中央区円阿弥２丁目	トレンチ	北白川下層IIｂ式	今井1986
13	舟山遺跡	大里郡川本町本田	遺構外	北白川下層IIｃ式	小澤・柳田1980
14	木曽免遺跡	坂戸市小沼	包含層	北白川下層IIｃ式	篠田2008
15	天神山遺跡	川口市赤井	遺構外	北白川下層IIｃ式	斉藤ほか1978
16	上加遺跡	さいたま市(大宮)北区日進町２丁目	遺構外	北白川下層IIｃ式	田代治ほか1999
17	椚谷遺跡	さいたま市(浦和)緑区大字大門	グリッド	北白川下層IIｃ式	青木・高山1976
18	彦久保岩陰	秩父郡吉田町阿熊	トレンチ	北白川下層IIｃ式	小林1966

第３表　埼玉県内における北白川下層式出土遺跡

以上の点を踏まえて、県内から出土した北白川下層式を集成した。網羅的に見ることが叶わず遺漏も多いことかと思われるが、ご寛恕願いたい。遺構出土の場合は遺構と土器、遺構内出土の代表的な土器を、包含層出土のものは土器のみを図示した。番号は第３表と対応する。

(1) 遺構出土

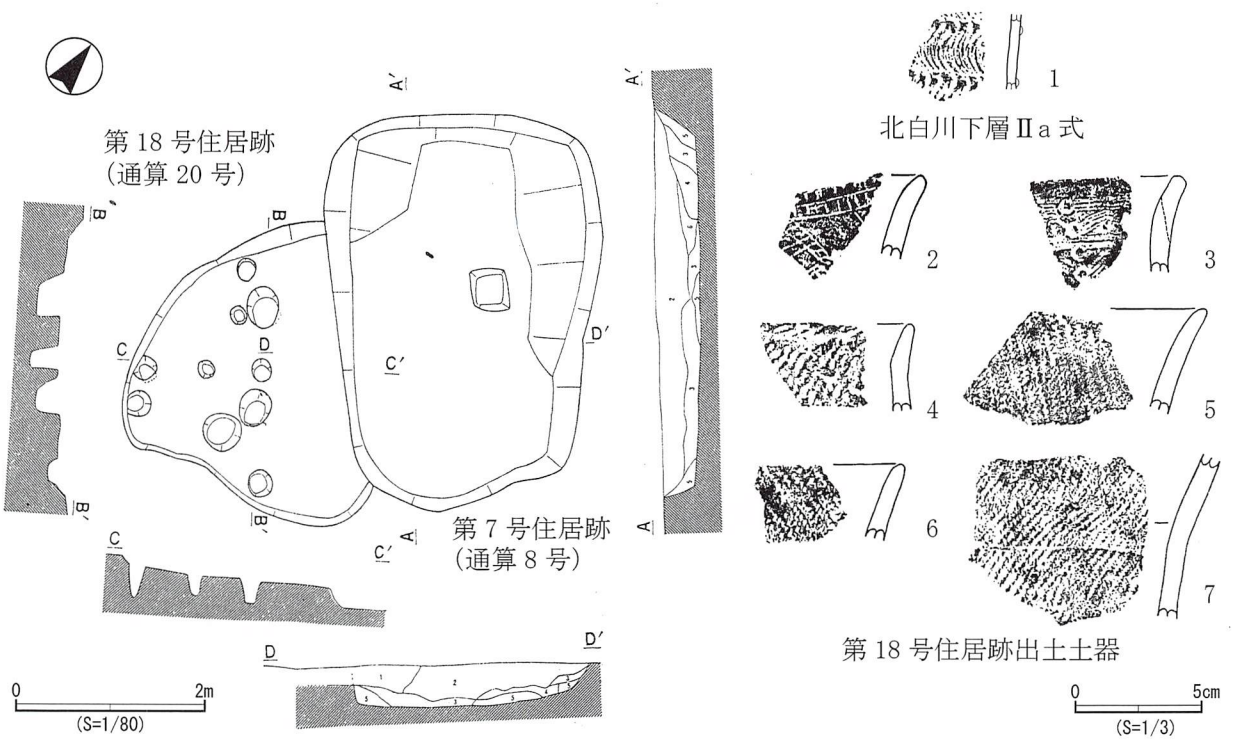
１．氷川遺跡(赤石・野村1981、小宮山1996)

上尾市の大宮台地に位置する。これまで３次の調査がなされ、1979年に行われた１・２次調査で、竪穴住居跡23軒、土壙32基を検出している。北白川下層式が出土したのは１次調査時の18号竪穴からである。18号竪穴住居跡は７号住居跡と切り合っており、平面図では７号の方が新しいように見えるが、断面図を見ると18号が新しくなっている。この点については３次調査で小宮山も指摘している(小宮山1996)。

７号住居跡では遺構内出土で花積下層～諸磯ａ式の土器が出土し、18号住居跡では床面から一括出土の関山式期所産の土器が認められたとある。北白川下層式についての記述は、報告中では記述がなかったが、３次調査報告において、横位に施文された棕櫚状爪形文とされ、諸磯ａ式との共伴と紹介された。ただし諸磯ａ式は覆土中からの出土であり、検討の余地があろう。

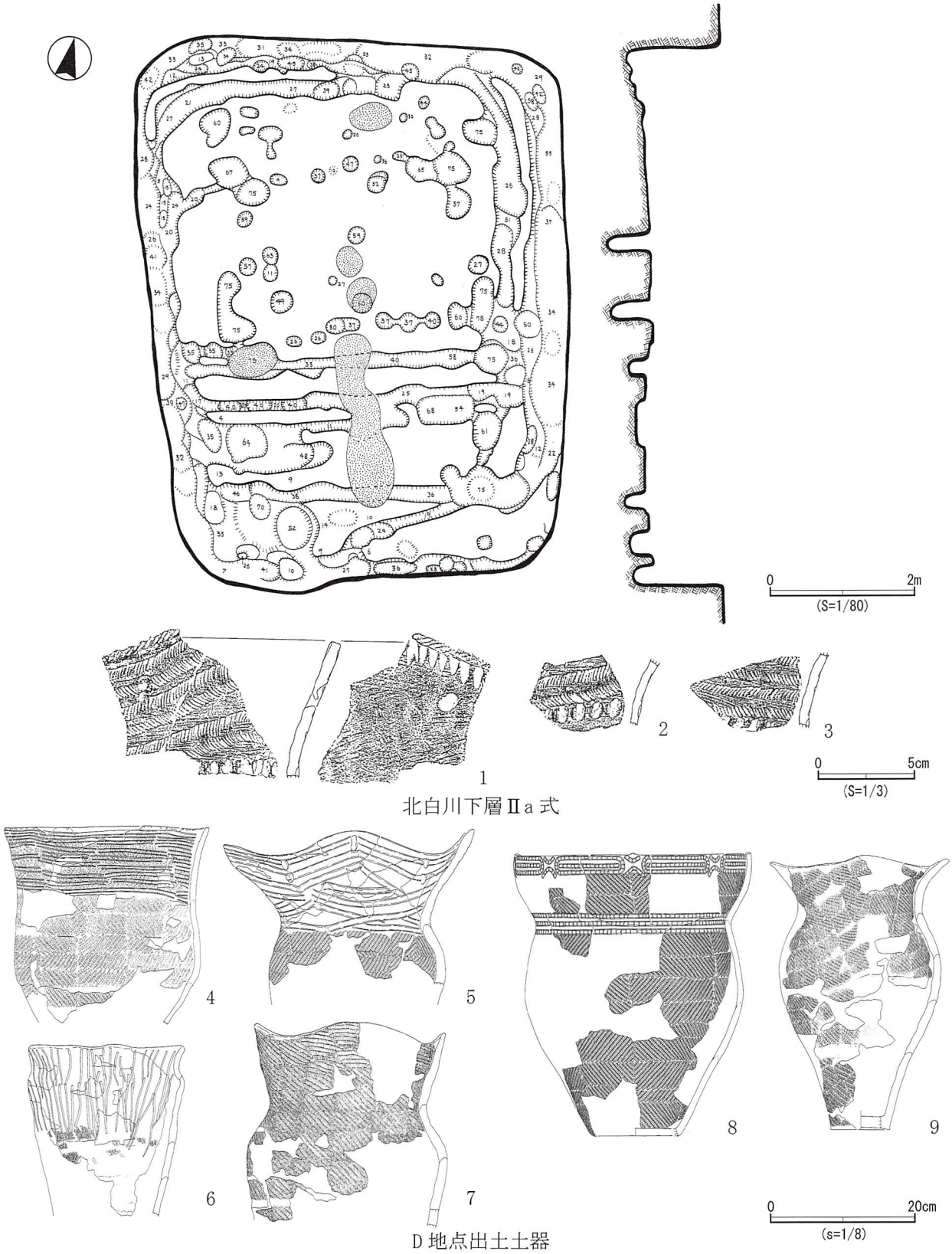
２．上福岡貝塚(黒坂1992、笹森・編1994など)

旧上福岡市に所在した上福岡貝塚は山内清男によって発掘され、その略報が示されている。上福岡貝塚は関山式の片口深鉢が注目されたこともあり、前期前半を主体とする遺跡のように捉えられていたが、奈良文化財研究所の山内清男資料の報告によって、黒浜式を主体とすることが判明している。Ｄ地点では住居跡が検出されており、黒浜式中～後半段階までの土器が出土している。住居跡は数度の拡張が確認されている。早くから縄文前期における竪穴住居跡の研究に寄与した遺跡で、当時の発掘調査を考えるうえで重要な遺跡である。

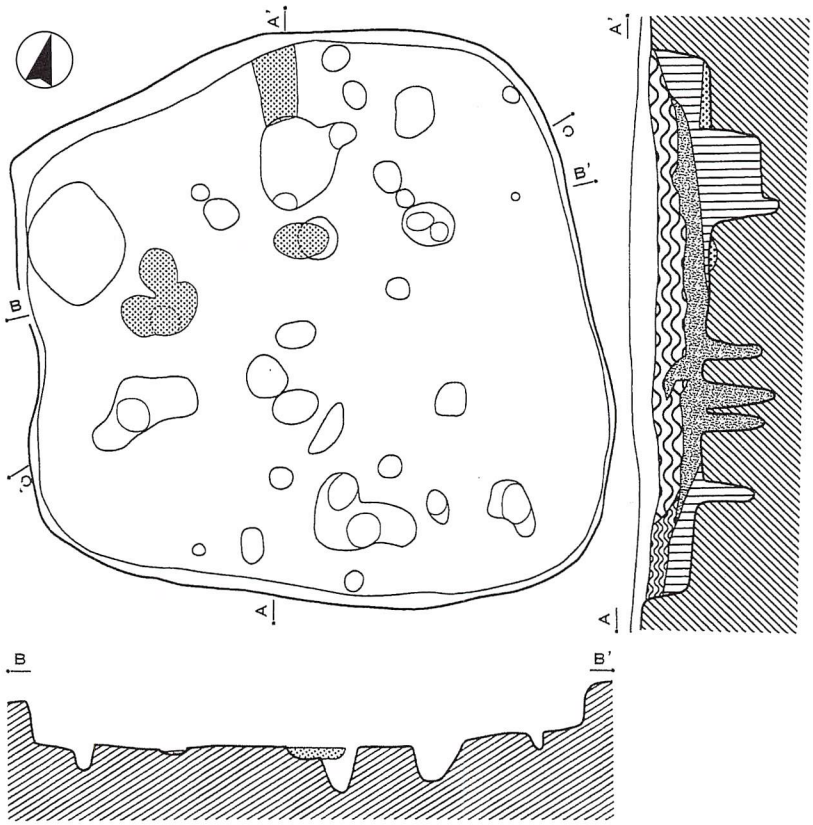


第６図　氷川遺跡

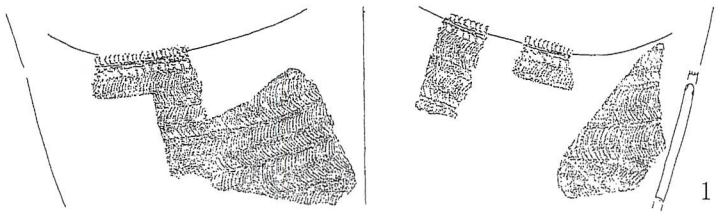
D地点から出土した3点の北白川下層式は江坂が紹介した資料で、波状口縁を呈する同一個体と考えられている。口縁部に幅広い連続爪形文が施され、文様帯を区画する刺突列がみえる。口唇部には縄紋が施されており、該期における北白川下層式の特徴をよく示している。



第7図　上福岡貝塚

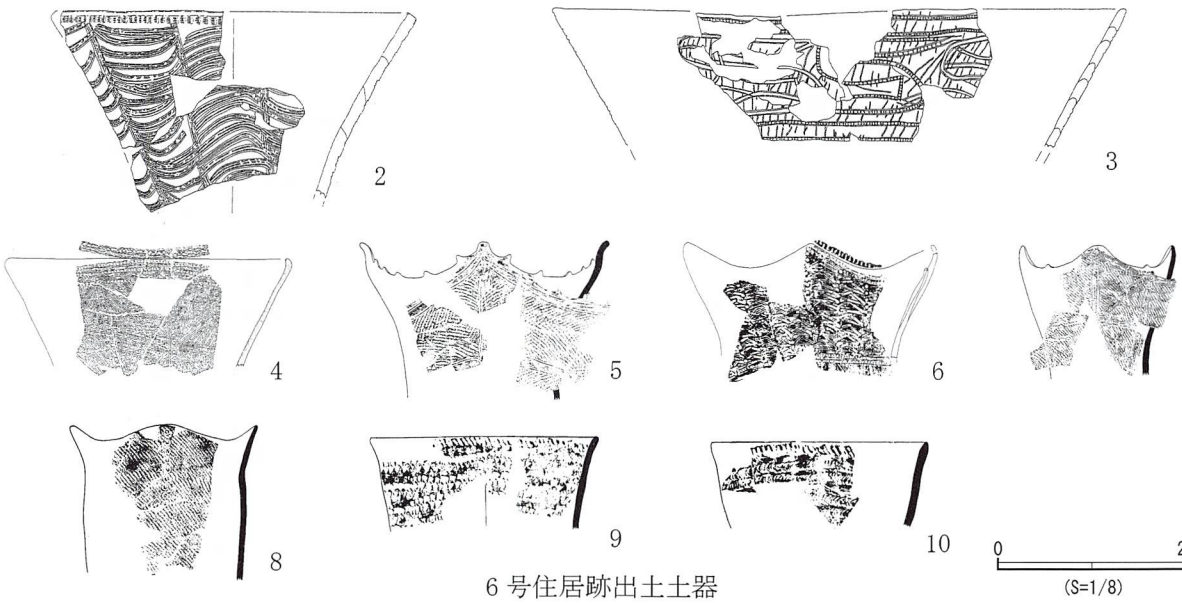


0　2m
(S=1/80)



0　5cm
(S=1/3)

北白川下層Ⅱa式



0　20cm
(S=1/8)

6号住居跡出土土器

第8図　米島貝塚

3．米島貝塚(小林1965、金子2007)

昭和36•37年にわたって2回の発掘が行われ、黒浜式の細分が唱えられた著名な貝塚である。古くから北白川下層式が出土したことが注目されていた。貝層の下にある土層から出土したようで、住居跡から出土した黒浜式でも新しい段階に対比されていた。報告者の小林は、既に中部地方における出土例との関係性を考察しており、「輸入品」という言葉を用いてはいるが搬入を想定しており、特筆すべき個体として取り上げられている。

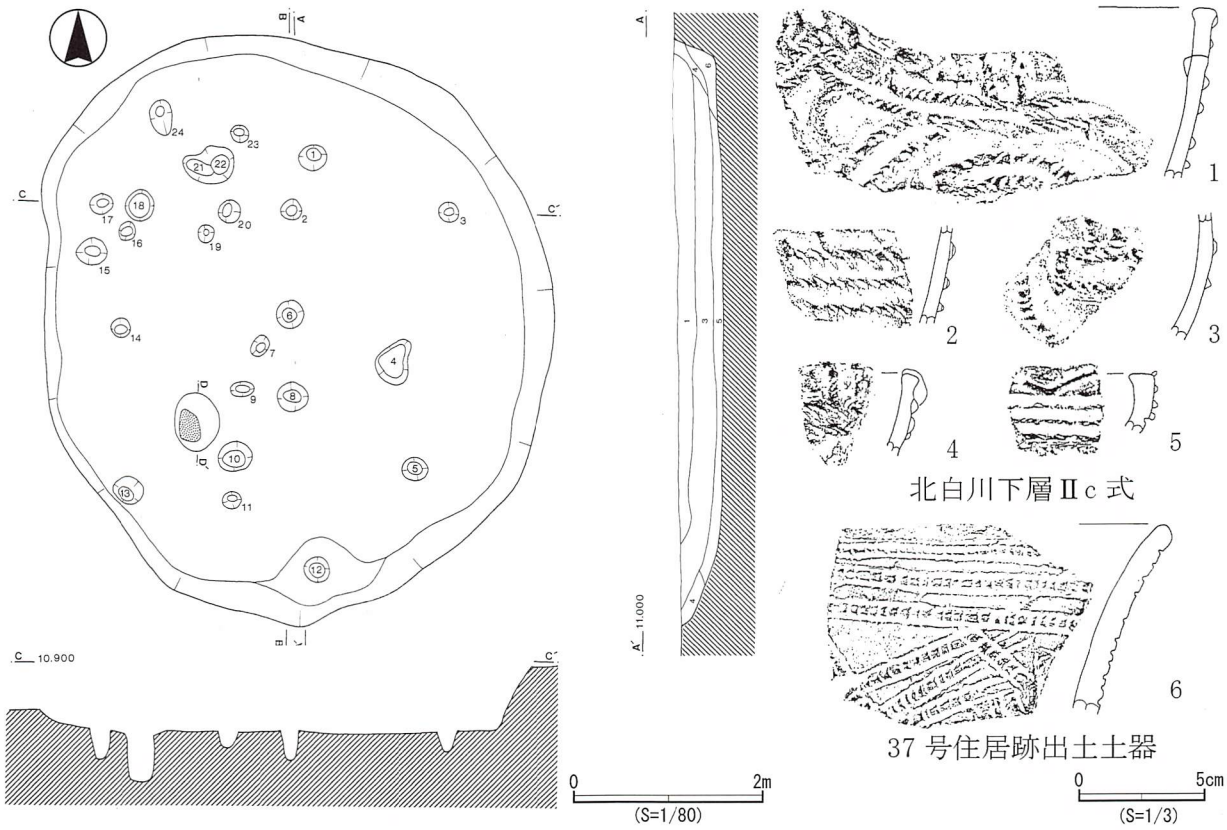
当初は平縁と考えられていたが、その後緩やかな波状縁として図上復元されている。棕櫚状の爪形文で、器壁が3㎜程度の極めて薄手な作りである。灰褐色に堅く焼きしまっている。

4．下加遺跡(田代・山形1990)

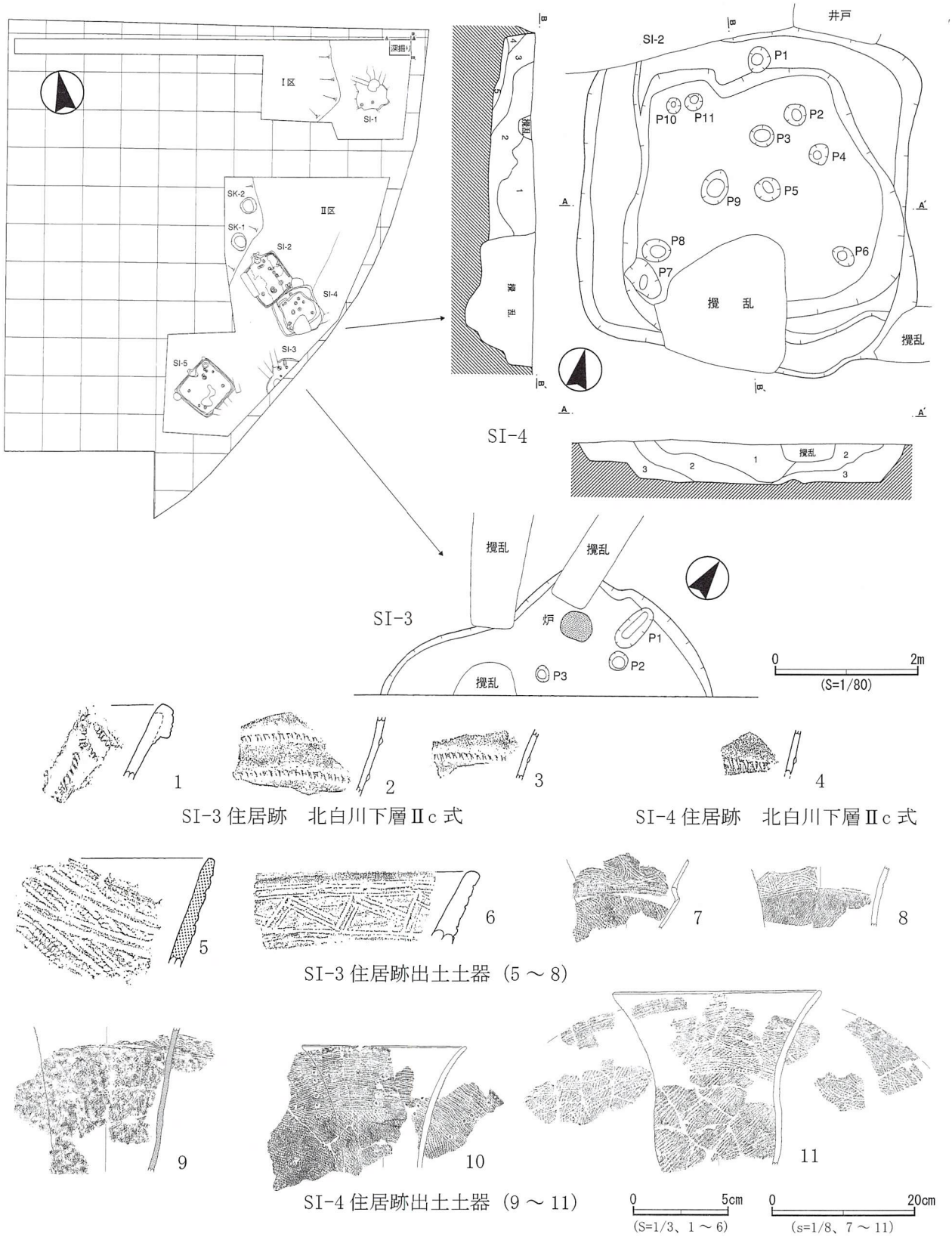
37号住居跡から出土している。遺物は覆土から出土しており、諸磯a式～b式までが出土している。北白川下層式との記述はなく、薄手で焼成の良い土器で、また文様から北白川下層式と判断した。第9図1～3は同一個体と考えられる。5は器壁が厚く諸磯b式かもしれない。住居跡から出土した諸磯b式は爪形文施文のものが多い。

5．町道遺跡(長谷川・荏原2004)

春日部市(旧：庄和町)の下総台地西端に位置する。庄和町教育委員会よって調査がなされ、3軒の縄紋時代前期住居跡が検出されている。SI-3、SI-4住居跡は隣接する位置にあり、諸磯a式を主体とするが若干の時間差を思わせる。SI-3住居跡から3点、SI-4住居跡から1点の北白川下層式土器が出土した。断面三角形の低い隆帯には、丁寧なキザミが施されている。報告者である荏原は、キザミには先端の尖った工具を想定し、いずれも搬入品を考慮している。また、いずれの住居跡からも少量の浮島式土器が出土している。



第9図　下加遺跡



第10図　町道遺跡

6．宮廻遺跡（第20地点）（隈本・加藤2009）

富士見市の遺跡として調査され、前期の住居跡は7軒検出されている。19Jと20Jは入れ子状になっており、20J・21Jより19Jは新しい。遺物は早期～前期までの遺物が出土しており、諸磯b式が主体を占める。多条のRL縄紋とLR縄紋による羽状縄紋が施された第11図1～3

は、「早期末？」としているが、19Ｊから北白川下層式が出土しているとある。色調については記載がないが、同時期に比して薄手の作りであり、こちらが該当するのだろう。

７．鷺森遺跡(笹森1987)

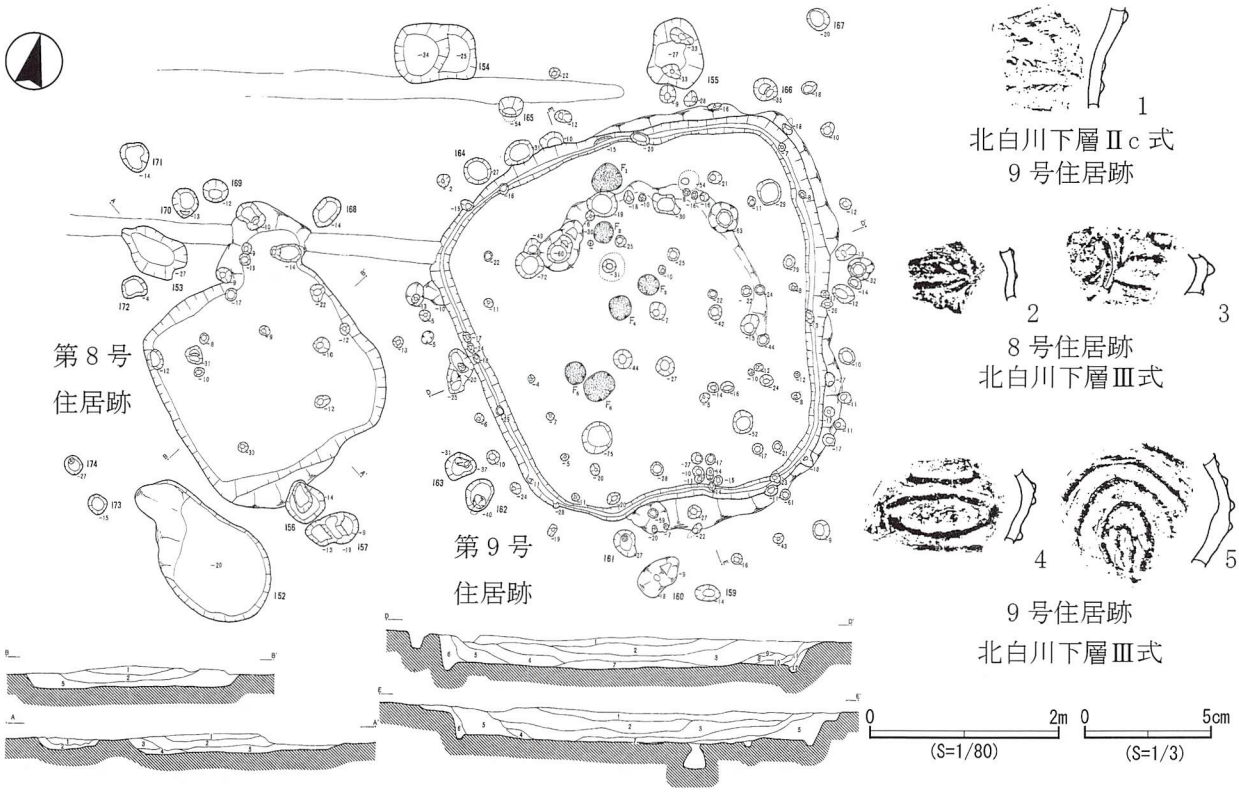
ふじみ野市(旧：上福岡市)駒林に所在する鷺森遺跡は、小学校建設のため昭和55年に発掘された。武蔵野台地縁辺部に形成された遺跡であり、標高７ｍの立川段丘面上に位置している。縄紋時代の遺構は住居跡15軒、土壙689基余りを数え、諸磯式期の集落跡である。特徴的な二単位波状縁の浅鉢が出土したことで知られる。

隣接する８号・９号住居跡から、同一個体と見られる北白川下層式が出土している。８号住居跡は覆土からの出土のみで、床面からは遺物が確認されていないようである。諸磯ａ式～ｂ式までの土器片が出土し、２片の北白川下層III式が出土している。９号住居跡では、３回の住居拡幅が想定されている。３片の黒浜式土器を除けば、９号住居跡では諸磯ａ式～ｂ式を主体としており、８・９号住居跡が近接する時期であることが考えられる。９号住居跡から出土した北白川下層式は、搬入品と見られる北白川下層IIｃ式と、８号住居と同一個体と考えられる２片の北白川下層III式である。

北白川下層IIｃ式は、薄手の外面灰褐色を呈するもので、刻みを施した凸帯文を矢羽根状に横位に施している。北白川下層III式も薄手の作りで灰褐色を呈しており、結節をもつ特殊突帯文に加えて、湾曲部の内面や突帯文の下位に爪の生跡を残すとある。同心円文の文様は北白川下層III式の一つの特徴であるが、全体の文様構成を把握するまでではない。

また､384号土壙からは北白川下層II式の影響を受けたとされる梯子状浮線文を有する個体が出土している。

第11図　宮廻遺跡　第20地点



第12図　鷺森遺跡

⑵ 遺構外出土

８．木曽呂遺跡(吉田1991)

弥生時代を中心に縄紋～江戸時代までの複合遺跡である。縄紋時代では時期が判然としない炉穴２基・土壙39基が検出された。包含層からは早期条痕文・前期花積下層式などを中心に、早期～後期までの土器が散見される。前期は、花積下層式～黒浜式が認められ、１点の北白川下層式が出土した。

非常に薄手の作りとされ、口唇内面にも刻みを有する。口縁直下には、半截竹管状工具の刺突が連続する。細い隆帯が横走しており、隆帯間には細い連続爪形文が施文される。

９．惣寺院西遺跡(高野1972)

高野博光によって報告された遺跡で、諸磯式とともに浮島式土器も出土している。棕櫚状爪形文を施文し、隆帯には刻み目が施されている。薄手の土器で、焼成も良好とある。

10．下手遺跡(大宮市1968)

大宮市下手遺跡で大宮市史に記載がある。２号住居跡からは繊維を含む黒浜式土器と、若干の諸磯式が認められる。北白川下層式が見つかったのは遺構外からである。構成は棕櫚状爪形文と刻みのある隆起帯からなるが、全体の文様は不明である。

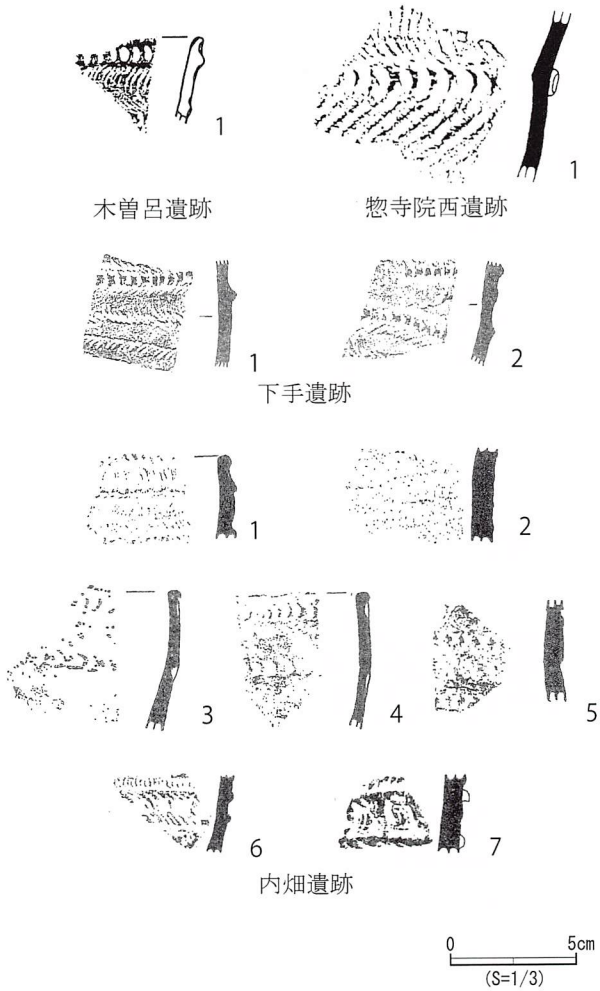
11．内畑遺跡(谷井1970)

新座市の武蔵野台地北部、標高30mに位置する内畑遺跡は、埼玉県遺跡調査会により発掘されている。早くから北白川下層式が出土した遺跡として知られていた。検出された遺構は黒浜式住居跡３軒、諸磯ａ式５軒、諸磯ｂ式１軒である。北白川下層式は８・９号住居跡よりそれぞれ出土している[4]。

第13図―内畑１が北白川下層IIａ式に比定されるもので、幅広い爪形文が連続的に押捺されている。下位の棕櫚状爪形紋は逆方向に施文される。薄手の土器で色調は灰褐色を呈する。焼成は良好で、緊緻な土器である。

３～５は同一個体の破片とされ、２連の間隔の広い爪形文が施文される。爪形文は浅い平行沈線を残している。色調は灰褐色を呈した薄手の土器である。

６・７は北白川下層III式に近いものと同定されるが、６は北白川下層IIｃ式であろう。胎土・焼成ともに良好な土器である。７は器面に幅広い爪形文を密に施し、その上からタガ状の浮線文(梯子状浮線文)を施している。浮線が粗雑で北白川下層式とするにはいささか躊躇がある。



第13図　遺構外出土北白川下層式(1)

12．御屋敷山(今井1986)

嵐山史跡の博物館(旧：歴史資料館)で進めた中世城館調査において試掘・測量調査を行った際に出土した。御屋敷山は、京浜東北線与野駅西方約2.5kmに位置する。

出土した土器は縄紋中期の資料が大半であり、わずかではあるが前期は関山式・黒浜式・諸磯ａ式が認められた。報告した今井宏は北白川下層IIｂ式に比定しており、口縁部がほぼ直立した器形を想定している。器厚約４㎜と薄く作られており、焼成も焼きしまっている。口縁部に爪形文、胴部に左右異った撚りの縄紋原体による羽状縄紋が施されてる。平行沈線区画のないＣ字状爪形文、口唇部には５㎜間隔の小さな刻みが見られる。

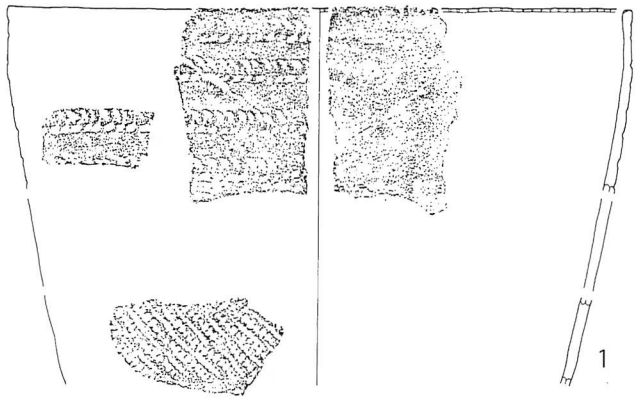
13．舟山遺跡(小澤・柳田1980)

深谷市(旧：川本町)に位置し、縄文前期関山式、中期の竪穴住居跡が検出されている。該当の土器はトレンチ出土の土器で報告時は第７群花積下層式とされていたが、梯子状浮線紋があり、北白川下層IIｃ式と判断した。１は表面の風化が著しく不明瞭であり、２と胎土が異なる。２は焼成が良く堅緻だが、茶褐色を呈する。

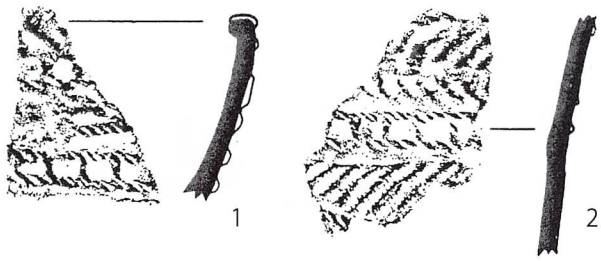
14．木曽免遺跡(篠田2008)

坂戸市の越辺川低地を臨む入間台地の北東端に位置する。主体は弥生時代中期の環濠集落であるが、東斜面部に関山式を主体とする早期撚糸紋期～前期末葉諸磯ｃ式までの包含層、時期を隔てて弥生時代中期の包含層があり、合わせて２層の遺物包含層がある。出土した北白川下層は、弥生時代包含層に流入・堆積したものであり、層位的な出土状況ではない。

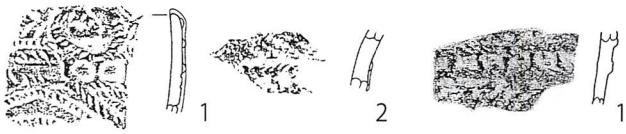
包含層Ｙ層には、弥生時代中期を中心として、前期の関山式のほか、少量の諸磯ａ式～ｃ式、前期末～中期初頭の土器が認められる。出土した土器は２点である。浮線を基調として細い爪



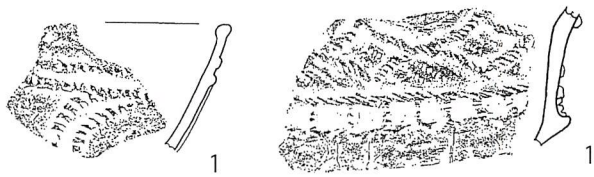
御屋敷山出土



舟山遺跡



木曽免遺跡　　天神山遺跡



上加遺跡　　椚谷遺跡

0　5cm
(S=1/3)

彦久保岩陰

第14図　遺構外出土北白川下層式(2)

形文を加えられるもので、4単位で口唇上に渦巻浮線が加えられることを想定されている。薄く作られている。2はいわゆる梯子状浮線文であるが、器壁はさほど薄くなく、模倣を思わせる。

15. 天神山遺跡(斉藤1978)

大宮大地南端に位置する遺跡で、前期初頭の住居跡が5軒検出された。出土土器には他に木島式が認められており、この地域への搬入を考えるうえで興味深い。出土した土器は梯子状浮線文を有しており、胎土に砂を含むが焼成は良好で黒褐色を呈する。報告者によると、「文様は北白川系のものと見られるが、胎土・焼成がやや趣きを異にし、中部系土器と思われる」とある。

16. 上加遺跡(田代ほか1999)

大宮市遺跡調査会による第2次調査次に出土している。遺構は縄紋時代前期の住居跡1軒、中期〜後期の土壙9基である。諸磯a式を主体とした包含層から黒浜式〜称名寺式までの土器が散見されており、北白川下層式も包含層からの出土である。器厚が薄く、丁寧な浮線文が施される。

17. 椚谷遺跡(青木・高山1976)

さいたま市(旧：浦和市)の大宮台地上にある遺跡である。遺構が検出されなかったh25グリッドから出土した。浅鉢であろうか。調査者は「諸磯b式にあたるもの」としながらも、中部地方(山岳部)にしばしば見られる土器としている。同グリッドからは前期の土器は出土せず、早期・中期の土器が多い。

18. 彦久保岩陰(小林1966)

花崗岩質砂岩で形成された岩陰の遺跡で、早期〜中期の土器が出土している。写真の掲載であるが、北白川下層式に特徴的な枠状浮線文をもつ土器が出土している。埼玉県塚屋・北塚屋遺跡(市川1983)でも同

様の構成をもつ土器が見つかっている。群馬県中野谷松原遺跡(第１図)出土のＩ文様帯に着目した場合、地文に縄文をもつ土器は模倣と考えるべきかもしれない。

以上が埼玉県内に点在する北白川下層式の状況である[5]。散発的ではあるが、北白川下層IIｃ式の出土数が多い。これは北白川下層式の範囲が広がり、中部・東海に似た土器が見られるようになる延長線で捉えられる。少数の出土とはいえ諸磯ｂ式の中段階と混在する状況は、関東前期の土器型式に対し、北白川下層式の影響を無視することは出来ないであろう。

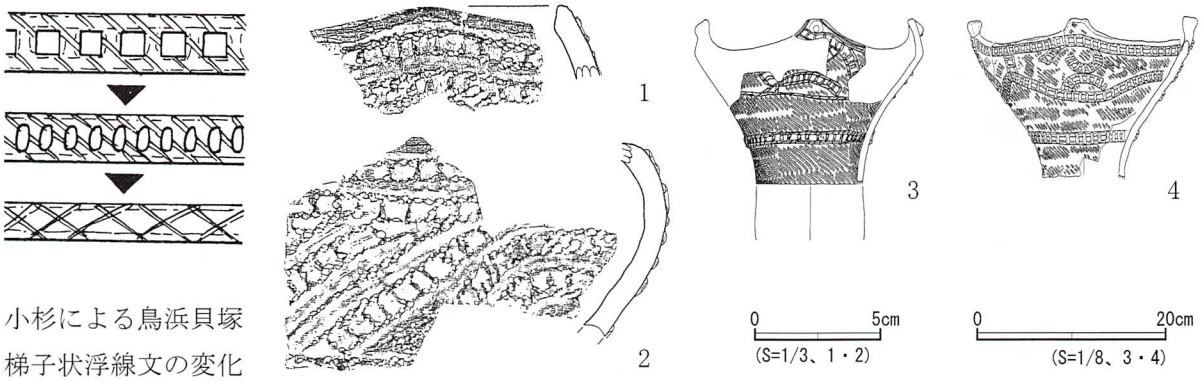
一方、諸磯式と北白川下層式は相互的な影響が認められる一方で、文様展開など多くの違いがある(鈴木1991)。装飾的な羽状縄紋を有する点、胎土・焼成の違いなども最たる例である。

加えて梯子状浮線文の存在はどうであろうか。梯子状浮線文は、Ｉ文様帯における上下に区画する廻線として北白川下層IIｃ式の特徴である。しかし、いずれも横位にのみ直線的に展開する。旧来より、諸磯式の梯子状浮線文は北白川下層II式の影響(川名1987)との見解があり、体部に施す例は東海地域や中部高地南半に比較的多い(鈴木2002)とも捉えられている。北白川下層式と諸磯式の接触地域にみられるものである。

しかし、諸磯式では梯子状浮線文を借用して横位に張り巡らされるだけではなく、多くはないが梯子状浮線文によって文様を描くものがある。埼玉県塚屋・北塚屋、群馬県愛宕山遺跡などで、その例がみられる(第15図)。北白川下層式の梯子状浮線文が梯子を一体としてキザミが施されるのに対し、諸磯式では横位の浮線１本ずつにキザミが施されたり、浮線上に施文しない場合が多い。諸磯が借用とされる規範になるのだろう。加えて、諸磯式では梯子状に連結する浮線文が粗雑で、施文の新旧関係が追えるのも違いの一つである。この相違は、両者の影響を考えるうえで否応なく西から東を想起させるうえで、留意しなくてはならない点である。

終わりに

以上、埼玉県内出土の北白川下層式について概観してみた。本稿では北白川下層式の集成とその概要を示したに過ぎない。先述の通り、埼玉県内における北白川下層式の出土状況は散発的であり、良好な共伴関係を示す資料はない。いずれも近接する時期からの判定となる。型式間において、弛まぬ編年網の構築は考古学の醍醐味であるが、容易なことではない。細別型式の併行関係を探るうえでの本稿を序として、今回は擱筆としたい。



小杉による鳥浜貝塚
梯子状浮線文の変化

1・2：埼玉県三ヶ谷戸遺跡　3：埼玉県塚屋・北塚屋　4：群馬県愛宕山遺跡

第15図　関東における梯子状浮線文

平成21年度　埼玉県立川の博物館企画展『埼玉圏の原始・古代人』が開催され、臨時的任用職員として微力ながらも携わることとなった。展示には、前任である中村倉司氏から熱い思いを受け、展示に臨むこととなった。企画展は埼玉県内に運ばれた多用な器物を展示するもので、展示資料の一つに御屋敷山出土の北白川下層式があった。縄紋時代前期の諸磯式との明らかな違いを感じ、灰白色の土器はどこの土から作られるのだろう、堅緻な焼き上がりにはどのような工夫がされているのだろうと疑問に感じたのが本稿執筆の契機である。報告者である今井宏氏からも多々ご教授頂いた。本稿執筆の契機を頂いた御二人に心から感謝を表したい。

思えば、自然の博物館・さきたま史跡の博物館での学芸員生活は、充実した時間であった。初めての業務に不平不満もこぼしたが、上司の岩本克昌氏・田中英司氏に叱咤激励され、また多すぎて書ききれないが博物館の多くの方々に支えられてきた。加えて、前期土器研究の先駆である前館長の鈴木敏昭氏からは日ごろから多大なご教示を頂くことが出来た。記して感謝したい。一方で、遅筆で編集の西口正純氏にはご迷惑をおかけしてしまった。深謝したい。

本稿執筆において、資料の実見では君島勝秀、栗岡潤の両氏にご協力頂いた。第５図作成では石井克彦氏に情報を提供して頂いた。文献の収集は石川久明、松嶋沙奈、近江美和の各氏からご協力を得た。記して感謝申し上げたい。

《註》

(1)　ただし、研究史において研究者が用いる型式名は研究者の見解を重視し、用いられている用語を記述する。諸磯式の浮線文と北白川下層式の凸帯文の用語に関しても同様である。

　Ⅱｂ式の細分案に加え、網谷編年への異論はあるが、自説の編年案を示すことなく型式名を列挙すれば、要らぬ混乱を招くのみである。自説の編年案を開陳して後に、詳細な併行関係を追うことを今後の課題としておきたい。

(2)　山内博士は、その後もローマ数字ではなく、アラビヤ数字を用いている。ここでのローマ数字は、佐原が北白川下層Ⅰ式……を用いて論述していることが関与している。加えて、当時までの発掘状況を吟味してこの発言を捉える必要があるだろう。

(3)　谷口が自説の展開で引用してあるが(谷口1980)、原典(安孫子1970)については筆者未見。

(4)　報告書中では、「住居址内出土土器を１時期の一様相としてつかみ得るものではなかったので、住居址内出土土器は住居跡の時期決定の際、検討するに留めて」分類を行ったとある。今回、埼玉県埋蔵文化財調査事業団にて実見し、それぞれ注記があったので、今後の参考までに住居跡を付しておく。

　第13図―内畑１は報告書中で口縁部が下になって掲載されていたので修正した。表裏面に赤彩と思われる痕跡があり注目される。

(5)　このほかに寄居町むじな塚遺跡、吉田町わらび沢岩陰、嵐山町山根遺跡などでも梯子状浮線文をもつ土器が見られるが、実測図・写真のいずれかの掲載であり、また実見出来ていないために模倣・搬入の判断が出来ない。現在のところは遺跡名を挙げるにとどめておきたい。また、今回は紙数の都合で取り上げなかったが、塚屋・北塚屋遺跡出土土器には、北白川の文様要素を持ちながら、諸磯的手法で施文している典型が多い。

《引用・参考文献》

青木義脩・高山清司　1976　『東北自動車道浦和市内遺跡発掘調査報告書』　浦和市遺跡調査会
赤石光資・野村侃司　1981　『氷川遺跡―１・２次調査―』　氷川遺跡調査会
安孫子昭二　1970　「№175遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査概報』(筆者未見)
網谷　克彦　1979　「土器」『鳥浜貝塚』　福井県教育委員会
網谷　克彦　1982　「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』　3　雄山閣

網谷　克彦　1989　「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観Ⅰ』　小学館
泉　　拓良　1979　「西日本の縄文土器」『日本原始』　世界陶磁全集１　小学館
市川　修ほか1983　『塚屋・北塚屋』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第25集
市村　勝巳　1984　「中部地方出土の北白川下層式・同系土器群について」『信濃』　第36巻第４号
今井　　宏　1986　「与野市御屋敷山出土の北白川下層式土器」『也加多』　７号　埼玉県立歴史資料館
今関　久夫　1990　『むじな塚遺跡群』　寄居町文化財調査報告　第８集
江坂　輝彌　1938　「東京市麻布區本村町貝塚調査概報」『考古学雑誌』　第28巻第10号
江坂　輝彌　1951ａ　「縄文式文化について（８）」『歴史評論』　30　第５巻５號
江坂　輝彌　1951ｂ　「縄文式文化について（９）」『歴史評論』　31　第５巻６號
江坂　輝彌　1951ｃ　「縄文式文化について(10)」『歴史評論』　32　第５巻７號
江坂　輝彌　1957　「前期縄文文化に対する一考察」『史想』　７号　京都教育大学
江馬　　修　1934　「飛弾における古式縄文土器」『石冠』　第２年第３號　飛驒考古學會
小野　正文　1989　「中部地方における北白川下層式土器の研究(北白川下層式土器の研究史)」『國學院大學考古学資料館紀要』　第５輯
大　宮　市　1968　「下手遺跡」『大宮市史』　大宮市
岡田　茂弘　1965　「近畿」『日本の考古学』　Ⅱ　縄文時代　河出書房
金子　直行　2007　「縄文時代　前期」『原始・古代資料　―考古―』　春日部市庄和町史編さん資料(十四)　春日部市教育委員会
鎌木　義昌　1959　「縄文前期文化」『世界考古学大系』　第１巻　平凡社
川名　広文　1987　「縄紋前期後半の土器について」『鷺森遺跡の調査』　郷土資料　第33集
京都大学文学部考古学研究室　1991　『先史時代の北白川』　京都大学文学部博物館
隈本健介・加藤秀之　2009　『市内遺跡発掘調査』　富士見市文化財報告　第61集
黒坂　禎二　1992　『上福岡貝塚資料　山内清男考古資料３』　奈良国立文化財研究所史料　第33冊
小杉　　康　1985ａ　「木の葉文浅鉢形器形土器の行方」『季刊考古学』　12号　雄山閣
小杉　　康　1985ｂ　「鳥浜貝塚における搬入土器、模倣土器の研究（１）」『鳥浜貝塚』　５　福井県教育委員会
小杉　　康　2003　『縄文のマツリと暮らし〔先史日本を復元する３〕』　岩波書店
小林　　茂　1966　『秩父・彦久保遺跡』　埼玉県吉田町教育委員会
小林　達雄　1965　『米島貝塚』　庄和町文化財調査報告　第１集
小宮山克己　1996　『氷川遺跡　―第３次調査―』　上尾市遺跡調査会報告書　第16集
斉藤悟朗ほか1978　『天神山遺跡』　川口市埋蔵文化財調査報告書　第８集
笹森　健一　1987　『鷺森遺跡の調査』　郷土資料　第33集　上福岡市教育委員会
笹森健一編　1994　『考古文献資料（１）上福岡貝塚』　市史調査報告書　第５集
佐原　　真　1956　「土器面における横位文様の施文方向」『石器時代』　第３号
篠田　泰輔　2008　「木曽免遺跡」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告　第352集
縄文セミナーの会　1999　『第12回　前期後半の再検討』　記録集
鈴木　康二　2002　「縄文土器の研究１　―前期後半の近畿地方を中心に―」『紀要』　15号　滋賀県文化財保護協会
鈴木　康二　2008ａ　「北白川下層式土器」『総覧縄文土器』　アムプロモーション
鈴木　康二　2008ｂ　「特殊凸帯文土器」『総覧縄文土器』　アムプロモーション
鈴木　敏昭　1980　「諸磯ｂ式土器の構造とその変遷(再考)」『土曜考古』　第２号　土曜考古学研究会
鈴木　敏昭　1991　「土器郡の変容―例えば、諸磯ｂ式浮線文土器の場合―」『埼玉考古学論集　―設立10周年記念論文集―』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木　徳雄　1989　「諸磯ａ式土器研究史（１）」『土曜考古』　第13号　土曜考古学研究会
鈴木　徳雄　1994　「諸磯ａ式の文様帯と施文域」『縄文時代』　第５号
鈴木　徳雄　1996　「諸磯ｂ式の変化と型式間交渉」『縄文時代』　第７号

鈴木　徳雄　2002　「諸磯ｂ式期における型式間関係と構造」『日々の考古学』　東海大学考古学研究室開設20周年記念論文集
関根慎二・大工原豊　1998　『中野谷松原遺跡』　安中市教育委員会
谷井　　彪　1970　『内畑遺跡発掘調査報告』　埼玉県遺跡調査会報告　第７集
谷井　彪ほか1980　『舟山遺跡』　埼玉県遺跡調査会報告書　第９集
谷口　康浩　1980　「縄文時代前期後半の土器」『藤の台遺跡』　Ⅲ　藤の台遺跡調査会
高野　博光　1972　「浦和市惣持院西遺跡出土の土器について」『浦和考古学会研究調査報告』　第５集
田代　治・山形洋一ほか　1990　『下加遺跡―大宮住宅建設に伴う発掘調査Ⅱ―』　大宮市遺跡調査会報告第30集
田代　治・新井和之・笹森紀己子・小峰智仁・山形洋一　1999　『上加遺跡（第２次調査）・中野林袋遺跡・茗花遺跡・指扇下戸遺跡（第２次調査）』　大宮市教育委員会調査報告　第65集
土肥　　孝　1982　「近畿地方」『縄文土器大成』　第１巻　早・前期　講談社
中村　倉司　2009　『平成21年度特別展　埼玉圏の原始・古代人』　埼玉県立川の博物館
長谷川清一・荏原　淳　2004　『町道遺跡　町道中遺跡』　庄和町文化財調査報告13集
増子　康眞　1982　「北白川下層式土器の再検討」『考古学研究』　第29巻第１号
増子　康眞　1999　「東海地方の諸磯ｂ式平行段階の様相」『前期後半の再検討』　記録集　縄文セミナーの会
松田光太郎・羽鳥政彦　1994　『愛宕山遺跡』　富士見村教育委員会
三森　定男　1938　「先史時代の西部日本」『人類学先史学講座』　２巻
南　　久和　2002　「鳥浜貝塚の前期土器群」『石川県考古学研究会々誌』　第45号　石川考古学研究会
宮内慶介・富元久美子　2011　「三ヶ谷戸遺跡　第１次調査」『飯能の遺跡（38）』　飯能市教育委員会
森川　昌和　1963　「福井県鳥浜貝塚をめぐる２、３の問題」『物質文化』　1
八幡　一郎　1935　「爪形文ある土器」『ひだびと』　第３年第10號　飛驒考古土俗學會
横山　　仁　2009　「前期の非在地系土器」『研究紀要』　26　千葉県教育振興財団
吉田　健司　1991　「篠谷ツ・木曽呂北・木曽呂」川口氏遺跡調査会報告　第14集
山内　清男　1936　「古式縄紋土器研究の最近の情勢」『ドルメン』　４巻１号
山内　清男　1937　「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』　第１巻第１号
山内　清男　1964　「縄文式土器」　日本原始美術１　講談社

図版典拠

各遺跡の掲載にあたり、レイアウトを変更し、方位・スケールを統一している。遺物は北白川下層式土器を１/３、その他の型式では拓本を１/３、復元個体を１/８とした。また遺構を１/80、遺構配置図を１/600とした。写真については任意である。

第１図　（関根・大工原1998）、（網谷1979）
第２図　（江坂1951ｃ）
第３図　（網谷1989）（鈴木2008ａ）
第４図　（鈴木1980）レイアウト変更
第５図　カシミール３Ｄにより筆者作成
第６図　氷川（赤石・野村1981、小宮山1996）
第７図　上福岡貝塚（笹森・編1994、黒坂1992）
第８図　米島貝塚（金子2007）
第９図　鷺森（笹森1987）
第10図　宮廻（隈本・加藤2009）
第11図　町道（長谷川・荏原2004）
第12図　下加（田代・山形ほか1990）
第13図　木曽呂（吉田1991）、惣寺院西（高野1972）、下手（大宮市1968）、内畑（谷井1970）
第14図　御屋敷山（今井1986）、舟山（谷井ほか1980）、木曽免（篠田2008）、天神山（斉藤1978）、上加（田代ほか1999）、椚谷（青木・高山1976）、彦久保（小林1966）
第15図　浮線紋の変遷（小杉1985ｂ）、三ヶ谷戸（宮内・富本2011）、塚屋・北塚屋（市川ほか1983）、愛宕山（松田・羽鳥1994）
第１表　（縄文セミナーの会1999）レイアウト変更
第２表　（小野1989）の対比表を（市村1984）（鈴木2008ａ・ｂ）により加筆修正
第３表　各報告書より筆者作成